

津波被災地で発生した衛生昆虫類 1

アカイエカ (*Culex pipiens pallens*)



我が国のアカイエカ種群の1種で、その他チカイエカとネツタイエカが分布する。幼虫発生源は有機物が多く含まれた水域が多く、都市部では雨水マスが重要な発生源となっている。夜間吸血性の代表的な蚊で、九州から北海道まで広く分布する。成虫で越冬する。

吸血源動物は、野鳥と哺乳動物がほぼ同率で、野鳥ではカモ、スズメの血液が、哺乳動物では人、ネコ、イヌなどの血液が検出されている。感染症との関わりでは、ウエストナイル熱の媒介蚊で、イヌ糸状虫の媒介蚊としても知られる。実験的には日本脳炎ウイルスの増殖活性が認められる。

コガタアカイエカ(*Culex tritaeniorhynchus*)



東南アジアから北海道まで分布するが、東北地方では成虫の発生密度が低い。成虫で越冬するが、どのような環境で越冬するか詳細は不明。日本脳炎の重要な媒介蚊で、ブタ、ウマ、ウシなどの大型動物を好んで吸血する。

幼虫発生源は湖沼、水田などの水域で、東日本大震災被災地の水田跡の水溜まりや側溝で多数の幼虫が採集された。また、トラップによる岩手県南部や宮城県の被災地での調査では8月下旬に多数の成虫が捕集された。今回の調査で塩分が含まれている水域でも幼虫が発生することが確認された。

トウゴウヤブカ (*Aedes togoi*)



日本全土に分布する。現在、海岸線のロックプール等の塩分濃度が高い水域に多数の幼虫の発生が確認される。昼間、夜間を問わずに吸血する。家畜、人を好んで吸血するが、岩手県の津波被災地跡に多数存在する。浄化槽、浄化槽関連のタンクに多数

の幼虫が発生した。現在、被災地周辺には家畜はおらず、人も住んでいないことから吸血源動物が何か明らかになっていない。かつて韓国と日本で患者が発生していたマレー系状虫の媒介蚊で、その他、イヌ系状虫の媒介にも関わっている。日本脳炎ウイルスの媒介能も知られている。

イナトミシオカ (*Culex inatomii*)



1968年に岡山県児島市で初めて確認され、その後、関西国際空港、千葉県谷津干潟、東京港野鳥公園、青森県十三湖等で生息が確認された。東日本大震災被災地での蚊の調査において、宮城県南部の仙台市、岩沼市、亶理郡の水田地帯。岩手県の陸前高田の津波被災地等で生息

が確認された。幼虫は塩分濃度が1%以下の水域で発生し、野鳥、人、野生動物などから吸血する。被災地の成虫からドブネズミの血液が検出された。イエカの仲間であるが、昼間吸血することも知られている。近縁種の*Cx. modestus*はウエストナイル熱の伝播に関わっており、日本脳炎ウイルスの媒介蚊と考えられている。

ヒトスジシマカ (*Aedes albopictus*)



人吸血嗜好性が高いが、人以外にイヌ、ネコ、ネズミなど多くの哺乳動物および野鳥、カエルからも吸血する。幼虫は墓石の花立て、竹の切り株、古タイヤなどあらゆる小水域に発生するが、都市部では雨水マスからの発生が顕著である。

東南アジア由来の種類で、徐々に分布域を北へ拡大しており、現在、盛岡市、大槌町まで定着が確認されている。デング熱、チクングニア熱の重要な媒介蚊で、ウエストナイル熱、イヌ糸状虫の伝播にも関わっている。昼間吸血性の代表的な種類である。

シナハマダラカ (*Anopheles sinensis*)



沖縄から東北地方まで分布しているが、北海道での分布は最近確認されていない。近縁種にオオツルハマダラカ、エンガルハマダラカなどが知られているが、形態学的分類は困難な場合が多い。日本では三日熱マラリア媒介蚊と言われ

ていたが、人吸血嗜好性が低く、マラリア媒介蚊としての重要性は疑わしい。夜間に主にウシ、ウマなどの大型の家畜から吸血する。本州では成虫で越冬する。幼虫は水田、湿原、池沼などの水溜まりで発生し、卵の両側には水面に浮くための浮囊がある。幼虫は水面に平行の姿勢で浮游し、水面の微少の餌をブラシ様の構造で濾し取るように摂取する。